城　郭　の　狭　間

30期生

Ⅰ　テーマ設定の理由

今までも、自由研究のテーマに、「城」は多く使われてきた。そして、そのほとんどは歴史か、或いは容姿についてのものであったようだ。しかし、「城」を考える時、最も大切なのは、攻撃と防衛ということであり、これなしでは、「城」の存在は有り得ないと思う。そこで私は、今まであまり顧みられることのなかった、この、攻撃と防衛という観点から「城」を眺めてみようと思い、そのうちの１つとして、狭間を選んだわけである。

Ⅱ　研究方法

〔1〕 実地調査

彦根城（滋賀　彦根市）　丸岡城（福井　坂井郡）　姫路城（兵庫　姫路市）

〔2〕 市役所観光課、または管理事務所に資料を依頼する。

松本城（長野　松本市）　犬山城（愛知　犬山市）　彦根城

和歌山城（和歌山　和歌山市）　宇和島城（愛媛　宇和島市）

松江城（島根　松江市）　高知城（高知　高知市）

松山城（愛媛　松山市）　　注・返送のなかったものは省いた。

〔3〕 調査する事柄

(1) 狭間の形とその寸法（縦、横、奥行）

(2) 狭間の形とその配置（床上からの高さ、狭間同士の位置関係）

(3) 築城された年、天守閣の様式

(4) 周辺の地理

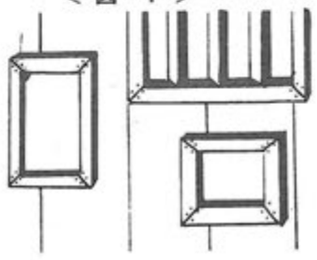
〔4〕 こうして１つ１つの城について調べ、疑問点は、自分の独断と偏見に満ちた推測で片付けていく。

Ⅲ　研究結果

〔1〕 まず初めに ― 狭間とは何か

狭間とは、塀や櫓、天守、門などの壁にある、四角、三角、円形の銃眼のことである。狭間は、その目的や形式によって、いろいろと分類されるが、この研究では、最も有り触れている、矢狭間（矢を射るためのもの、普通縦長の長方形）、鉄砲狭間（鉄砲を

＜図　1＞



撃つためのもの、普通正方形か、正三角形）だけを取り上げることにした。

〔2〕 狭間の形

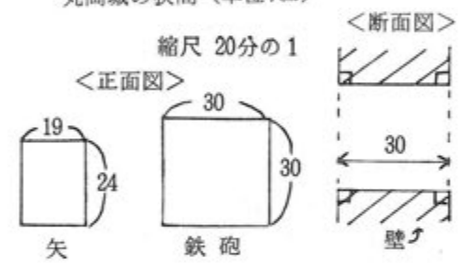
(1) 初期 ― 丸岡城

丸岡城は、1576年（天正４年）に、柴田勝豊によって築かれた、現存天守では、日本最古のものである。1576年とは、信長　武田氏の長篠の戦の翌年であり、鉄砲伝来から約30年しかたっていない。つまり、丸岡城の狭間は、極めて基礎的な、初期のものであると言える。

さて、丸岡城の狭間は、＜図２＞の様に、やや従長の矢狭間と、正方形の鉄砲狭間の２種類である。寸法も全部統一されており、よく言えば規則正しいし、悪く言えば全く趣向が凝らされていない。そのうち、他城と比較して、特に目立っているのは断面で、他城のが、攻撃防御面の都合上、外すぼみになっているのに対し、丸岡城のは、直方体をストレートにズボンとくりぬいてあるだけだ。

＜図　2＞

丸岡城の狭間（単位；cm）



反対に、他城と共通しているのは、奥行30cmと、鉄砲狭間の30×30cmである。まず、奥行は城壁の厚みであるから、変化がなかったのは当然と言える。また、鉄砲狭間の30×30cmについては、30cmが、丁度１尺に値するので、切りがよかったのだろう。

この様に、初期の狭間は、工夫のないただの穴に過ぎず、次に上げる彦根城と、格段の差がある。

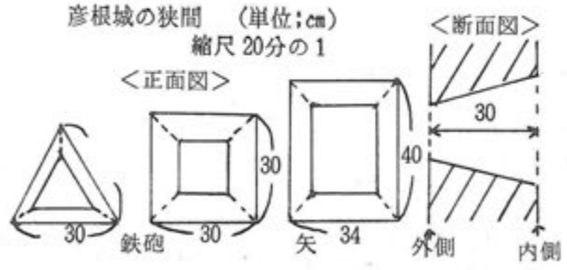
(2) 中期～後期 ― 彦根城

彦根城は、1604年に差工、1622年に完成した城である。

この城の狭間は、鉄砲狭間と矢狭間の２種類であるが、＜図３＞を見てみると、丸岡城とは違い、外すぼみになっている。これはどういう面で有利かと言うと、防御面では、敵から見れば的が小さく狙い憎いし、攻撃面は、視野は狭くなるが、狙いが定まり易いのだと思う。

＜図　3＞

彦根城の狭間　（単位；cm）



また、外すぼみになっている狭間では、内側の四角形（大きい方）と、外側の四角形（小さい方）が相似形になっている。鉄砲狭間では、その１辺の比が２：１というのが多く、矢

狭間は、各々違っていて、規則性は見られない様だ。

以上の通り、狭間の形は、後になる程工夫され、改良されていった。では、これらの配分や配置はどうなのだろう。

〔3〕 矢狭間と鉄砲狭間の配分

(1) 初期 ― 丸岡城

<表1>を見てほしい。これは、各壁に取り付けられている狭間の数の表で、天守1階のみを対象にしてある。これによると、矢狭間9個、鉄砲狭間10個と、ほぼ同数になっている。もしこれが特異な例でないのなら、当時の戦では、矢と鉄砲を、1：1の割合で使用したと言えないだろうか。

<表1>

壁	矢	鉄砲	計
北	3	2	5
南	0	2	2
東	3	3	6
西	3	3	6
計	9	10	19

1590年に建てられた松本城を見てみると、矢狭間12個、鉄砲狭間11個で、やはり1：1になっている。資料が少ないので断言はできないが、これは、多分正しいだろうと思われる。

(2) 中期～後期

中期～後期というのは、関ケ原直後～17世紀後半以降であるが、初期との相違が見られるだろうか。<表2>は、代表的な4城のデーターである。これを見ると、矢狭間：鉄砲狭間は、ほぼ1：2になっているのがわかる。やはり、後になる程鉄砲が重要視され、主な戦力が鉄砲になったからだろう。

しかし、この推論は、あまり期待できない。というのは、彦根城のデーターが、この推論にストップをかけたのである。<表2>では、彦根城も、他城と同じ様に2：1になっている。ところが、これを各壁ごとに分けてみると、意外な結果が出てくるのだ。

<表2>

	鉄砲	矢	計
松江	20	12	32
彦根	21	10	31
松山	10	9	19
高知	13	6	19

彦根城の天守は、北西、北東、南東、南西の四方を向いているが、これを大きく北と南にしてしまうと、北側には鉄砲狭間12個に対し、矢狭間1個しかないが、南側には、それぞれ9個ずつある。これは何故だろうか。

彦根城のある琵琶湖東岸は、穀倉地帯である。よって、彦根城を改める時、稲の存在する6～10月は水田になっているので、兵の動きがとりにくい。ところが、冬になると、空地または畑と化し、攻め易くなる。反対に、冬に弱い彦根城としては冬の風に合わせて狭間を作らねばならない。つまり、北風の強い冬は、北側に矢を使用できなかったのではないかと思う。増して彦根城は、136 mの山の頂にあるのだから、強い風を受けたのに違いない。

こうしてみると、彦根城の場合、矢を使えない箇所だったので、鉄砲狭間のみ設置したと言える。それでは反対に、矢も鉄砲も使用が可の場合は、矢狭間と鉄砲狭

間は、1：1の割合で付けられたとも言えることにならないだろうか。

こういうことから、前述の2：1となった推論の正否がわからなくなってしまった。ただ確実に言えるのは、当時の戦では矢と鉄砲の両方が使われており、狭間にも、それが表われているということである。

なお、今までは天守1階についてだったが、天守2階、3階…では、鉄砲狭間のみ設置されている。これは、2階、3階…から矢を射っても、その効力が、あまりなかったからだろう。武器そのものの、能力に関係している様だ。

〔4〕 狭間の配置

(1) 狭間はどのくらいの間隔で付けられているか。

<表3>は、各城の平面図から読み取ったものである。「窓の下」というのは、格子窓の下に付けられている狭間のことで、「単位数」というのは、柱と柱の間を1単位とした時、壁全体が何単位あるかということだ。すなわち、「狭間の数」－「窓の下」＝「窓の下以外の狭間の数」となり、また、窓の、ほぼ100％が、1つの長さが1単位に値するので、「単位数」－「窓」＝「窓のない壁の単位数」となる。

<表3>

	狭間	窓の下	$a-b$	単位数	窓	$c-d$
松本	23	1	22	28	4	24
松江	32	5	27	44	15	29
彦根	31	3	28	64	26	38
松山	19	0	19	26	10	16
丸岡	19	0	19	40	16	24
	a	b		c	d	

<表3>によると、この「窓の下以外の狭間の数」と、「窓のない壁の単位数」が、ほぼ一致している。つまりこれは、窓のない部分では、各柱と柱の間に、1つづつの狭間があるということであり、柱と柱の間には、必ず、窓か、狭間があるということでもある。

長さで言うと、柱と柱の間は、一般に1間（＝6尺＝180 ㎝）ぐらいなので、狭間は、1間に1つある、と言える。また、この間隔は、隣同士で補い合って、死角が、できないようになっている。

(2) 規則性のある並び方

狭間の並び方に規則性を持つ城は、数多くある。ここではその一例として、松山城を上げることにした。

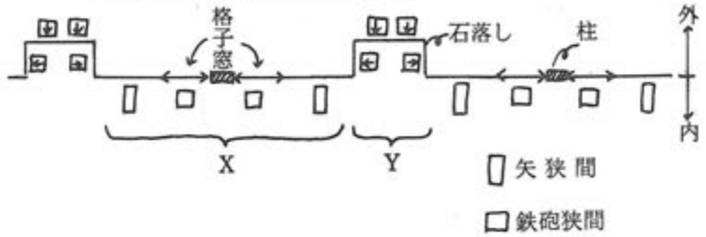
松山城の狭間は、<図3>に示すように、柱を挟んで格子窓が2つあり、各格子窓の下に、鉄砲狭間がある。そして、それらの窓の両脇に、矢狭間が1つずつ並んでいる。また、石落しの正面の壁に2つ、側面に1つずつ、計4つの鉄砲狭間がある。この並び方で、前者の格子窓のをX、後者の石落しのをYとすると、XとYの関係は、XYXYXY……と続いていくようになっている。

(3) 狭間の床上からの高さ

狭間の床上からの高さは、各城によって違っていて、代表となる値が得られなかった。160～150 ㎝ぐらいの、非常に高い付け方をしているのもあれば、40㎝前後

＜図　4＞

松山城の狭間の配置（縮尺適当）



の、非常に低いのもある。多分、射撃姿勢に関係している筈だが、値にばらつきかありすぎて、その基準が何なのかわからなかった。後になって、本を調べてわかったのだが、鉄砲狭間は、座った時の目の高さが狭間の中心にき、矢狭間では、矢を射る格好をした時、ひざが、狭間の下端にかかり、肩ぐらいの高さに狭間の中心がくるようになっているらしい。これからいくと、鉄砲狭間の中心は、床上60～70㎝ぐらい、矢狭間の中心は、床上100㎝前後になる様である。

〔5〕　隠し狭間について

隠し狭間というのは、外から見えないように、板を嵌め、壁を塗ってある狭間で、今までに上げてきた城の中では、彦根城と松江城がそうである。

何故わざわざ隠してしまう必要があったのかというと、理由は２つある。

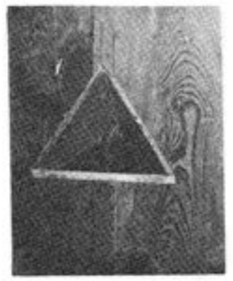
まず１つは、緊急時に破って使うのだから、敵側は、どこに狭間があるのかわからないし、どこから狙われているのかもわからないということ。

もう１つは、美観上の問題である。松江、彦根城について言えば、両城共、家康が、征夷大将軍になった同じ頃に築城されている。もうその頃は、大分戦乱も治まり、両城主の堀尾、井伊氏は、関ケ原での東軍で、武勲をたてているので、あまり戦乱再発の恐れがなかった。そこで、美観上、外から見えぬよう、隠し狭間にした。

また、冬には、狭間から風が入ってくるので、なるべくなら、閉じておいた方がよいとも、思われる。

丸岡城の狭間は、隠し狭間ではないが、内側に引き戸が付いていた。これも、雨風よけだろう。１つの工夫である。

しかし、美観上まで考えてでも、狭間を付けたのは、狭間がそれだけ大切であったからなのだろうか。（写真は、左―彦根城の隠し狭間、右―丸岡城の狭間の引き戸）



〔6〕　狭間は役に立ったのか

今まで、狭間の工夫や規則性など、ずっと書いてきたが、今度は、もっと現実的に考えて、狭間は役に立ったのかどうかを述べてみようと思う。

城が舞台となる合戦では、大抵の場合、城側に勝ち目はない。まして、天守閣まで敵が押し寄せてこようものなら、武士道を考えてみても、さっさと城に火をつけ、城主、奥方、重臣共々、切腹した筈だ。

多分、狭間は使用されなかったのだろうと思う。

例えば、籠城戦の時であれば、城塀には、狭間に兵を配置させたかもしれない。しかし、それ以外では、使うことがないし、狭間からの射撃威力など、わずかなものに違いない。宇和島城に狭間がないのは、その表れではないだろうか。

しかし、それでも、大抵の城には狭間が付けられている。〝もしもの場合、これが役立つかも〟とか、〝完全な防御設備で、安全を確保しょう〟とかいう考えなのか。それとも、我々の家に換気扇があるが如く、ごく当り前の様に、別に何も考えずに取り付けたのか……。

いずれにせよ、実際狭間は役に立たなかったろうし、作って損したことは確かである。

役に立つと言えば、今日、観光客が、狭間から外の景色を見て喜んでいるのをよく見るが、彼らには、大いに役立っているのかもしれない。

Ⅳ　結　　論

この研究の結論は、特別１つに定まっていないので、何とも言えないが、この研究のすべてが新しい発見だったので、すべてが結論だと言っても構わないと思っている。

Ⅴ　総　　括

「狭間」という、本当に小さな穴１つ１つに、戦国の武将達が命を燃やした様に、400年たった今、私も同じ物に、全精神を投げかけてみた。狭間に触れ、考えるうちに、武将達の情熱がいかにすごかったか、そしてその情熱は、我々が何かをつかもうとするのと全然違った、現在の常識をいかに越えたものであったかを感じた。

最初に、攻撃と防御なしでは、「城」は成立しないと書いたが、それより以前に、この情熱が、「城」を支えているのだということを付け加えて、この研究を結びたいと思う。

尚、参考文献がなかったため、以上の研究は、すべて、私の推論であり、かなり間違っている点もあると思う。もっと沢山の城のデーターがあれば、正確な結果が出ただろう。結果の確認ができなかったのは、今回の研究で一番残念であった。